



Title	「留学ポートフォリオ」に関する報告：「阪大スタイル」のeポートフォリオ設計
Author(s)	近藤，佐知彦
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2016, 20, p. 55-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「留学ポートフォリオ」に関する報告

—「阪大スタイル」のeポートフォリオ設計—

近藤 佐知彦*

要 旨

本稿では、大阪大学国際教育交流センター短期プログラム研究開発チームが開発・運用を始めている留学ポートフォリオ（eポートフォリオ）についてレポートする。本システムは海外での学修（研究）の質保証を補助するシステム（エビデンスの蓄積ツール）として運用することが可能で、理工系の学生であっても十分に意味深い海外留学が出来るようサポートすることなどを目的に開発された。その機能は複合学位での学びの質保証などへと応用できると考えられる。また様々な機能の活用により、十分な資料（エビデンス）を整えた上での「休学留学への単位付与」や「インターンシップ管理」などにも発展的に利用できることを示しつつ、今後の学生交流、特に派遣留学の拡大に向けての鍵となるツールとして「留学ポートフォリオ」を説明する。

【キーワード】 eポートフォリオ、主体的な学び、理工系学生、休学留学、インターンシップ

1 はじめに

本稿は、大阪大学国際教育交流センター（以下、国際センター）で開発・運営している「留学ポートフォリオ」に関して、その開発の背景や「阪大スタイル」のシステムとしての特色、今後の派遣留学などをサポートするため、どのように運用が可能であるかの考察を行う。

まず、近來注目を集めている「ポートフォリオシステム」の背景について森本（2011, 2015）などに拠りつつ論じたい。なぜなら、ポートフォリオの採用には、従来の学習観・教育観へのパラダイムシフトを根底に蔵しているからだ。それは従来の行動主義・認知主義から、社会構成主義の台頭に伴って絶対的な知識観が崩壊し、森本（2011）の言を借りれば「学習活動や課題、評価方法がリアルなものでなくてはならないという『真正性（authenticity）』が強調され、真正な学習（authentic learning）が求められるようになってきた（p23）」と言う事情がある。教室での学び

を絶対的だとすれば、そこで記憶した知識を客観的測定法であるテストで測定する、と言う「学び方」や「テスト法」がデフォルトとされる。しかし、それではいわば教室でしか通用しない頭でっかちな「教室秀才」を作ってしまう。大学に求められているのは、必要な知識を収集統合し、自ら適切な判断を下すことが可能で、現実社会の課題解決を図る能力を備えた人材を育成することであり、またその人材のコンピテンシーを測定するためには、従来の教育手法や測定法は不適切ではないか、と言う問題意識が生れてきた。

このパラダイムシフトについて、森本（2013）はわかりやすい事例をあげている。

自分たちが中学3年の野球少年の親だと仮定して、息子が小学校時代から所属している地域クラブでレギュラーに定着できていないことや、それでも必死で練習に打ち込んでいることを知っていたとする。その息子が引退試合で代打出場したにもかかわらず、三振を喫して最後の逆転のチャンスを潰してしまっ

* 大阪大学国際教育交流センター教授

たとしても、彼のそれまでの野球経験は「結果が出せなかった」ののだろうか。スコアブックの上では、そうなるしかないにしても、である。中学3年生が小学校時代から野球を通して継続的に体得してきたものは、社会生活を送っていく上で有用な「目標達成のための努力」「主体的な課題解決姿勢」「上下関係やチームワークの体得」「ストレスコントロール」など、今後の社会生活を送っていく上での基盤的スキルであることは明かだ。そして、それらは学校の教科書学習だけでは身につかなかったであろう「学び」である。野球に打ち込んだ経験を通じての「学び」とは、その子の成長そのものとして認識されるべきであり、ただ単にレギュラーに定着できたか否か、ましてや打率などの計量可能な規準で判断・測定されるべきではないのは自明である。

近年、知識重視の暗記型人材だけではなく、課題解決力を持った人材を育成することが大学に対して求められるようになった。これは知識を測る従来型の評価（この場合は evaluation）方法では測定できない力をもった人材が期待されている、ということである。換言すれば大学教育が、どのような知識を伝授するかインプット重視から、輩出された人材がどのようなパフォーマンスを持っているかのアウトカム重視になってくるにつれ、学習成果に基づく教育の質向上・質保証が大学機関にとって重要なポイントとなったのだとも言える。そして、そういったコンピテンシーを持った卒業生をどれだけ輩出できたのか、教育についてのアカウントビリティを如何に果たすかが、大学に求められるようになっている（森本 2011）。知識の伝授ではなく、自ら主体的に学びとる心と能力を持った（「学士力」を備えた）人材育成が大学の使命とされるようになり、そのための評価（この場合は assessment）ツールとして、学びの過程を振り返ることが出来る「ポートフォリオ」の重要性が認識されはじめていると言っても良い。

主体性を持った学びについて「自ら前のめりになって自分の足で踏み出していくようにワクワクしながら学び続けること」だとする森本（2015）は、一例として約700以上の種類があるという「ポケットモンスター」を挙げる。小学校低学年の児童が分厚い「ポケモン辞典」を引きながら、喜々としてポケットモンスターに関する知識を蓄積し、友達と対戦しているのが、探求型学習と言わずして何であろうか。自発的な学習とは学生に自ら学習に向かわせる

内発性をあたえ、またその学習が公平に評価される環境を整えることによって引き出される。

大学で学ぶことが心底から楽しいとすることが出来るように、そしてそれが「海外留学」などの主体的な活動をサポートし、評価にも結びつけることを目的として、短期プログラム開発研究チームでは「留学ポートフォリオ」の開発導入を進めている。

2 eポートフォリオとは？

eポートフォリオを使った「真正（authentic）な」学習とはゴール設定（目標設定：goal setting）、ルーブリック（評価基準：rubric）の作成・確認、学習成果物（artifacts and works）の作成および収集、評価活動、eポートフォリオのセクション（精選：selection）、公開（showcase）からなり、評価については、自己評価（セルフ・アセスメント：self assessment）、相互評価（ピア・アセスメント：peer assessment）、教師評価・他者評価のサイクルを経る。

このサイクルを実施するにあたって、eポートフォリオでは、学習プロセスにおいて生み出されるデータや情報を、必要に応じた電子的な形式で、学習成果物や学習履歴として作成・編集・統合できる。そして多くの学習のエビデンスを収集し、管理することが可能となる。

eポートフォリオが有するもう一つの特色として、ネットワークを介することによって、自己評価だけでなく、相互評価、教師評価・他者評価の機会や回数を飛躍的に増やすことが可能となり、密な相互作用が期待できる事があげられる。そして、自らの学習をモニタリングしながら、必要に応じて学習をコントロールすることでメタ認知が促進され、リフレクションが誘発される。ここでいう「リフレクション」とは試行錯誤や議論を通じて「わかった！」と学習が生起される瞬間である。

90分の授業に受動的に参加して一つの学術的知識の伝授を待つ学習者と、主体的にその分野に関わる学習に取り組み、他の学習者との相互作用などから、多くの「わかった！」を得る学生とでは、学びの量とその深みとが、まったく異なってくることは容易に理解できるだろう。それこそがeポートフォリオを導入して学習をより主体化できるプラットフォームを整える理由である。

もう少し詳しく森本（2015）が述べるところをた

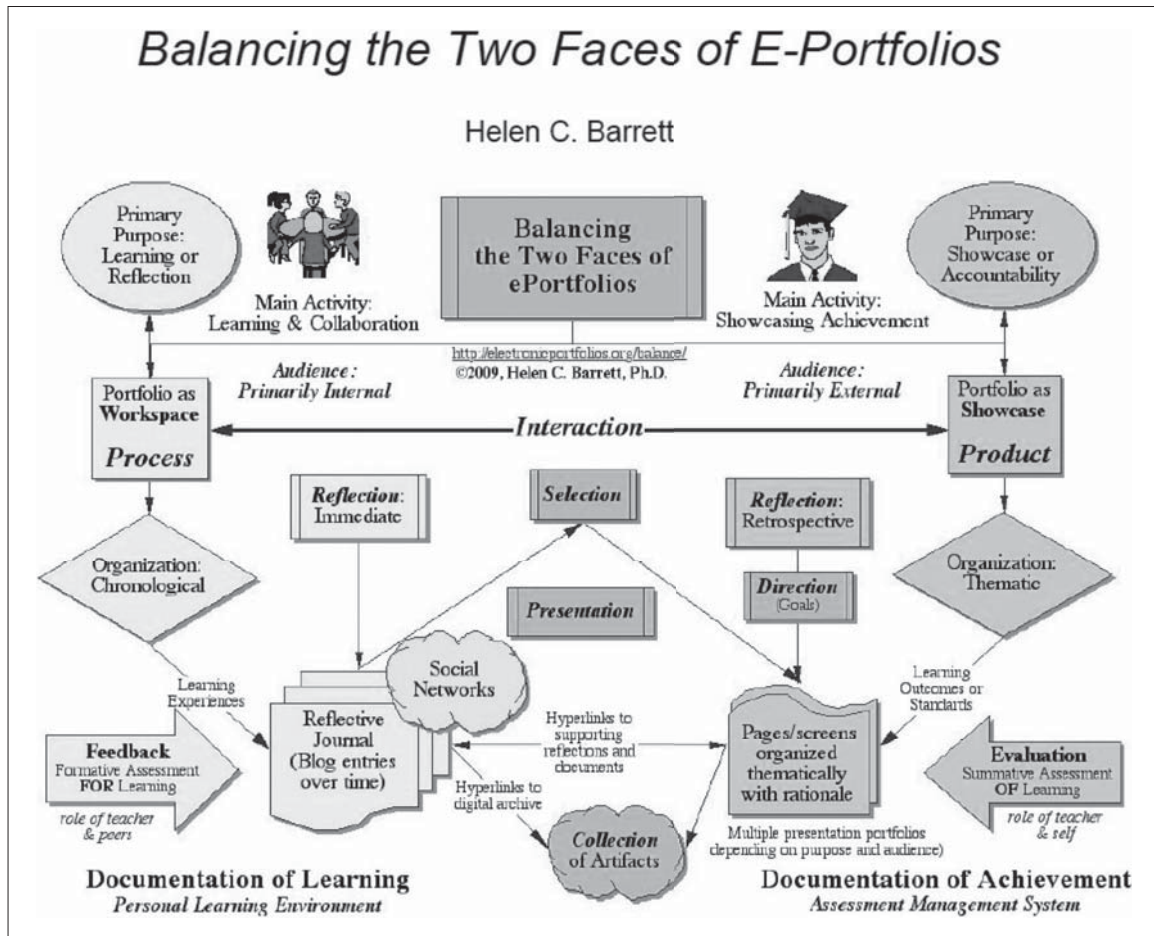


図1 Barret (2011) より

どれば、eポートフォリオには「学習者の学習・評価を促進するツール」としての役割と「学習者の成果を引証づけるためのエビデンス」としての役割の二つに分けられる。本来であれば、第一の役割を強調しつつ多くのリフレクション（わかった！）を生み出すことが大事なのだろうが、現実には、システム導入校においては主として第二の役割が期待されている状況にある。ただし、エビデンスの蓄積も学生が頻繁にシステムに接続して、活発に学習してこそその結果であり、例えば Barrett (2011) が提示するように（図1）、二つのベクトルの中で、どのような運営をするかで、各校のeポートフォリオ・システムの特色が生まれるとされる。

3 阪大派遣留学の課題とポートフォリオ

さて、H26年度に採択された本学のスーパーグローバル大学創成支援事業では、H35年には1,113人の学生が海外で単位取得を伴う留学経験をする目標を

設定した（全学の定員は21,000人）。ちなみにH25年実績は652人であり、現状ではおおむね学部生の1.9%、大学院生の5.3%が留学を果たしている状況である。しかし、10年後には学部生4.6%、院生6.8%に単位を伴う留学をさせる、という大幅に背伸びをした目標が設定されたことになる。現在の倍以上の学部学生が海外に出て単位取得を伴う留学経験をする事が求められている訳だ。筆者は国際センターで「短期学生交流」の運営に与っていく中で、この目標の達成にある程度の見通しをつけねばならないが、本学特有のポイントとして、特に二つの問題が気になっていた。

第一に、海外留学に対して文系学生の関心のたかさに比べ、理科系部局では学生・教員ともに、いずれもその必要性などが理解されていない、という傾向である。実験実習などが密に組み込まれたカリキュラムを持つ理工系・医歯薬系の学生はそもそも海外留学が自らの学びの選択肢に入っていない。

たとえばH27年度（I期およびII期）に募集をし

て、H28年度に本学の大学間協定校への交換留学に申請してきた学生で、語学スコア不足など明らかに申請不可の者を除いた180人のうち、理工系は工学部・研究科から5名、基礎工学部・研究科から3名の計8名申請者を得たのみであり、医歯薬系からの申請者はなかった。残りがいわゆる文系学部からの申請であり、なかでも133名もが外国語学部から出願してくるという割合となった。これはH27年度に限った話ではなく、交換留学に応募してくる学生の6割から7割以上が外国語学部からというトレンドはすっかり定着している。

このように一部部局に偏った留学性向は、理工系部局での実験実習のカリキュラムによるものであると説明されることが多い(近藤2005)。カリキュラムの問題さえ克服できるとすれば、派遣留学生への開拓余地がまだまだあることを示している。【巻末資料1：派遣留学応募者の所属部局年次リスト】

カリキュラムの目的が国家資格である医歯薬系は別としても、特に理工系の最先端を走っている本学の学生は、卒業後に企業の研究者として働くにせよ、アカデミックな世界に身を投じるにせよ、常に世界の第一線で戦っていく覚悟が求められる。本学のカリキュラムとのバランスを考慮しつつも、出来るだけ早い時期に海外でアカデミックな経験を積んでおく必要性は高い。

また大阪大学でのH27年5月現在の15,535人の学部学生の内訳は、工学部3,735人、基礎工学部で1,963人であり、おおむね理工系で7,000人、文科系で6,500人、そして医歯薬系で2,100人ほどの学部生が学んでいる。最大勢力である理工系学生の派遣留学に対する意欲が低いということは、本学で派遣留学を促進する上での課題であるとともに、留学中のカリキュラム進行などを適切にサポートするシステムが導入されれば、学生時代からの派遣留学に前向きになって頂ける「のびしろ」が期待できる、ということでもあるはずだ。

また外国語学部からの交換留学派遣希望者の申請書などを点検すると、その多くが1年間の留年覚悟での海外留学経験となっていることに気がつく。彼らにとっては交換留学の二本柱の一つである「単位互換」を活用した規定年限での卒業可能性などはあまり重視されておらず、卒業年次や就職活動のタイミングなどについて大いに気にかけている人間科学部や経済学部・法学部などの学生と異なっている。

大阪外国語大の伝統を引き継ぐ外国語学部生にとっては「留年覚悟でも1年間たっぷり留学」が一つのカルチャーとなっており、教員もそれを怪しまない風土があるわけで、これが第二の問題点である。

実はこの風土は、外国語学部からは「休学留学」が多数あるらしい、ということにも繋がっている。実際、英語圏など授業料の高い大学への留学ならいざ知らず、アジア圏など物価水準の安い大学への留学であれば、学生にとっては本学に学費を支払う必要がある「交換留学」より、本学へ学費支払いをストップして留学先に授業料を払う「本学を休学しての留学」の方がより経済負担が軽い、という側面もある。現状で推定されるところでは、H26年度に海外留学を経験した本学学生は、本学で把握しているところで1,494人。この数字には、交換留学制度による派遣や、研究留学制度を使って留学した学生や、大学が関与しているサマースクールや語学研修への参加などが含まれているが、それらを除いた三分の一ほどの351名が「休学しての海外留学」だと推計される。これらは、いわば大学としてコミットメントしていない海外留学という位置づけとなる。他学では少額の在籍料などの支払いを条件として、休学中についても単位を付与している例が見られ、本学においても同様の仕組みを考える必要があるだろう。

少なくとも旧外大時代から盛んに行われている慣行を「見える化」することで、本学学生の海外志向がよりハッキリとなる。そして、先に述べたように、自ら目標設定をするeポートフォリオは、究極の学習への自主的取り組みともいえるべき「休学留学」と親和性が高い。ポートフォリオに蓄積されたエビデンスを利用して単位を付与できれば、大学からそれらの学びを認定する機会を確保でき、また、常に大学と「繋がっている」環境を提供することで、休学中であるとはいえ阪大ファミリーの一員であるそれらの若者への危機管理上の貢献も期待できる。

ちなみに森本(2011)は現代のeポートフォリオについて、ラーニング、デベロップメント、アセスメント、ショーケースの4つの側面からそれぞれ特色づけを試みている(p.60, 表1参照)。既述のような傾向を持つ本学の学生であるが、理工系学生に対しては「ラーニング」と「アセスメント」の側面を強化するシステムを提供することで、また、外国語学部の学生に対しては「アセスメント」のプロセスをサポートを通じ、派遣留学生を増やしていく可能



図2 大阪大学留学ポートフォリオ

性について次節で触れたい。

4 本学システムの特色と発展的な可能性

本センターにおける「eポートフォリオ」開発についての発端は、H24年に公募が行われた「グローバル人材育成支援事業」（現在は「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」）に本学が申請をし、筆者もその申請に関与した時期に遡る。当事業は派遣留学の促進を柱とするものであり、申請プランを作る過程で、量と質とを確保しながら、派遣留学を促進するためには、それを支えるシステムが必要である、との認識から「ポートフォリオ」導入を含んだプランで応募している。残念ながらその応募では本学は採択リストから漏れてしまったため、ポートフォリオ導入は宙に浮いてしまったものの、派遣促進のためには必要なシステムであるとの認識は残っていた。

そのため、H25年度に本センターが総長裁量経費を頂いたのを機に、この種のポートフォリオとしては非常な低予算で、開発をはじめたものである。

この際、財源が単年度予算という事情を反映して、阪大型のポートフォリオには「低コストであること」「後年度負担をなくして運用できること」という条件が課されることになった。システムのカスタマイズによって「アカウント数」による収入を見込む既存のポートフォリオ・システム導入は、最初から選択肢にあがらなかった。仮にそのようなシステムを導入しても、後年度に継続して維持できなければ、そもそも導入の意味が無いからだ。

このような悪条件でのシステム構想であったが、幸いアンザインターナショナル社に条件に合ったシステムの共同開発の提案を頂いて開発に着手、その後のスーパーグローバル大学創成支援事業の構想の中にも盛り込まれることになり、予算措置を受けられるようになった。特にその運営にあたる特任事

務職員を含むサポートが受けられるようになったのが鍵となった。上記のような経緯から、留学ポートフォリオは、現在は国際教育交流センター短期留学プログラム開発研究チーム内に設置されている。H27については学内ユーザー（教員・学生など）の利便性を向上させるために、シングルサインオンシステム（SSO）への完全対応などを果たしている。

さて、本学の「留学ポートフォリオ」は、既存のシステムに比べ、以下の特色を持つ。

- ① SSO採用によるアクセス性の向上
- ② セキュリティを確保しつつ学外者へのアカウント付与により以下の利用も可能になる。
 - A) 同一学生に対する複数教員による（研究）指導
 - B) 規定プログラム外（例えば休学留学）での「学び」の見える化
 - C) 中でも「インターンシップ活動」など、今まで大学としてコミットしていなかった活動の見える化

上に上げた特色の中で、①については自明のこととして特段には論じないが、同時にSSOは休学中の学生も使用できることを確認済みである。本学から派遣される留学生在が様々なかたち（ファイル形式）で、海外で学びとってきた成果をシステムにアップロードすることで、単位認定などにつながるエビデンスの蓄積などが容易に、また同一のフォーマットの下で行われることが期待できる。つまり、ポートフォリオでのラーニング、アセスメントの側面が活かされる。また、学生にとってはそれらの成果をエントリーシートなどにエクスポートすることが可能となり、ポートフォリオがショーケースとして活用できることになる。ただし、ここまでは従来型のポートフォリオのシステムでも対応できる事柄である。

その一方、②については、海外に留学中の学生の学習もしくは研究の状況が日本にいる関係者にとって適宜モニターできるだけでなく、海外の研究者を含めた学外の方にも、特定学生の学習（研究）進捗状況を監督しうる条件が整備されたというべきだろう（②A）。実験実習が密に詰まった理工系のカリキュラムであっても、その実験等を海外で行っている様子がトレース可能になり、あまつさえ、例えば留学先の教員によって、実験時の評価が日本にいる指導

表1 ポートフォリオ分類（森本2011）

名称	説明
ラーニング・ポートフォリオ	学習の誘導・促進を行い、学習プロセスおよび結果を引証づけるために使われるeポートフォリオである。学習の途中の未完成物も含まれる。ラーニング・ポートフォリオは、学習プロセス全体を通して、ポートフォリオ所有者にリフレクションの機会や足場賭を提供するので、学習支援ツールとして用いられる。
デベロップメント・ポートフォリオ	長期間にわたる継続的な自己・専門性の成長と能力育成のための計画立案や、そのプロセスにおける引証付けと追跡のための手段を提供するeポートフォリオである。
アセスメント・ポートフォリオ	アセスメントに用いられるeポートフォリオで、アセスメントのために収集された学習成果物が主な対象である。また、評価の基準であるスタンダード（standard）やルーブリックを伴う。アセスメント・ポートフォリオは学習成果と学習活動を結びつける際に有効な手段となる。
ショーケース・ポートフォリオ	ベストワークを集めたeポートフォリオである。例えば、学生は履歴書（resume, CV）のように、雇用のための出願や面談、自身の能力やスキルを公に表明するために用いる。大学機関では、教育の質保証・質向上のアカウンタビリティのエビデンスとして用いる。

教員とも共有できるようになる。

したがって、ひとりの学生について、学外を含む複数の関係者が、その学習研究進捗を管理できるわけで、この機能をフルに使うことによって、交換留学の活性化といったレベルを大きく超えて、複合学位や共同学位課程の実質化などについても、サポートをするシステムとして発展的な運用も可能になるだろう。

また、セキュリティポリシーを発展させていく中で、大学関係者以外からのアクセスを可能にすることで、例えば学外での「インターンシップ」を単位化する際のエビデンス収集ツールとしても活用できる（②B）。学生本人の自己申告だけでなく、インターン先の関係者からの評価も同一システム上に蓄積され、客観的評価が可能になる。

現在筆者らは、開発者であるアンザスインターナショナル社やサイバーメディアセンター、短プロチームの専門職員とともに、SSOによって運用されているセキュアなシステムに、学外者のアカウントをどのように連携させていくかなど、残された課題に取り組んでいる。

またインターンシップの制度化や休学留学の単位化などについては、本学の教務において整備が必要な案件となっており、システム整備とともに、そういった体制整備も並行して行っていく必要がある。今後はそういった整備も進めながら、新たに手にしたツールである「留学ポートフォリオ」を学内各部局に使って頂き、結果的に本学からの派遣を増やしていくための基幹システムに育てたい。【巻末資料2

(p.63)：エクスポートフォリオ機能概念図参照】

5 おわりに

本稿では、本センターがスーパーグローバル大学育成支援事業などのサポートを受けて整備しつつある「留学ポートフォリオ」について、ポートフォリオの本学導入の背景と将来像などについて、概論したものである。

筆者は教育学や教育工学の専門家ではなく、ユーザーサイドのかなり偏った立ち位置から、システムを導入した経緯があり、理論的な面については、詰めが甘い、と言うことはヒシヒシと実感している。本来であれば「主体的な学習」を如何に引き出すべきか、もしくは「海外留学体験を学生に対して如何に主体的に取り組ませるべきか」と言った問題意識でeポートフォリオを論ずるべきだが、エビデンスの蓄積といった、いわば従来型の学習評価の側面から、ポートフォリオの導入を進めてきた感が抜けきれない。

留学促進・倍増を支えるインフラとして、本ポートフォリオを必ず成功させなければならないが、同時に、我々古いタイプの教員が従来の教育観を脱して、より自律的・主体的な学習者中心の教育を学内に普及させていくために、新システムが「触媒」としての役割を果たしてくれれば、と願っているところでもある。

参考文献

- Barrett, H. (2011) Balancing the Two Faces of E-Portfolios
<http://electronicportfolios.org/>
- 森本康彦 (2011) 「高等教育における e ポートフォリオ
の最前線」 システム／制御／情報 55 巻 10 号 pp.
425-431
- 森本康彦 (2015) 「e ポートフォリオがわかる！虎の巻
【入門編】」 主体的学び第 3 号 pp.5-32
- 近藤佐知彦 (2005) 「あらたな短期留学プログラム構築
への提言——本学交換留学プログラムの現状とあわ
せて——」 多文化社会と留学生交流 第 9 号 pp.35-
50

【巻末資料１ 派遣留学応募者の所属部局年次リスト】

部局名	H23(2011)募集 H24(2012)派遣		H24(2012)募集 H25(2013)派遣		H25(2013)募集 H26(2014)派遣		H26(2014)募集 H27(2015)派遣		H27(2015)募集 H28(2017)派遣	
	I 期	Ⅱ期	I 期	Ⅱ期	I 期	Ⅱ期	I 期	Ⅱ期	I 期	Ⅱ期
文学部		1	1	2	2	6	1	4		4
文学研究科		3	2	2	0	3		1		2
人間科学部	2	4	2	7	1	7				3
人間科学研究科								1		1
外国語学部	9	65	18	68	11	96	13	96	25	108
法学部	3	7	1	15	5	12	5	15	7	8
法学研究科			1					2		
経済学部		2	1	3	1	7		2	5	6
経済学研究科		1		1				1		
理学部				1						
理学研究科										
医学部										
医学系研究科				1						
連合小児発達学研究科										
歯学部										
歯学研究科										
薬学部				1						
薬学研究科										
工学部		2			3	4		1	1	1
工学研究科		1		1			2		1	2
基礎工学部				2		1				3
基礎工学研究科					1					
言語文化研究科		3	2	2	1	1			1	2
国際公共政策研究科					1	1		2		
情報科学研究科										
生命機能研究科		1						1		
高等司法研究科		1								
合計	14	91	28	106	26	138	21	126	40	140

【巻末資料 2 エクスポートフォリオ機能概念図】

